一一年八月の牧田先生御逝去ののち間もなくのことである。こんにち改めて牧田諦亮先生の広範な研究成果の多くを一望できる機会を与えられたことは、斯学界にとって誠に意義深い。また幅広い分野から寄稿された各巻附録からは、その人柄や研究生活が偲ばれる。全巻完結に至るまで多年にわたり煩労を厭わず編集に携わられた、落合俊典先生をはじめとする本『著作集』編集委員の御尽力に対し、この場を借りて深甚なる謝意を表するものである。

（全八巻、臨川書店、
二〇一四年七月～二〇一六年十一月、
菊版平均四〇〇頁、
本体価格九〇〇〇円～一四〇〇〇円）

（知恩院浄土宗学研究所研究助手　かとう　ひろたか）
（佛教大学非常勤講師　ばば　ひさゆき）
（函館大谷短期大学非常勤講師　ふくしま　かさね）
（関西大学東西学術研究所非常勤研究員　みやじま　じゅんこ）

礪波　護　著
『隋唐佛教文物史論考』

河上　麻由子

本書は、礪波護氏による第二の論文集である。読者の理解に資するため、複数の「コラム」が設けられる。隋唐史研究を長年牽引してきた礪波氏の研究を、著者の配慮に助けられつつ体系的に学ぶ機会を得たことは、後学にとって僥倖というべきである。

以下、本書の構成を記し、章ごとに内容を紹介していく。ただし、紙幅に限りのあることからコラムの紹介は行わない。講演記録は平易な文章で綴られることもあり、本紹介文では簡単にとどめる。

第Ⅰ部　隋唐の仏教と国家
第一章　天寿国と重興仏法の菩薩天子と
第二章　法琳の事蹟にみる唐初の仏教・道教と国家
第三章　嵩岳少林寺碑考
コラム1　嵩岳少林寺碑
第四章　玄秘塔碑考
第五章　文物に現れた北朝隋唐の仏教
コラム2　塚本善隆著『大石仏』
コラム3　京都大学人文科学研究所の宗教研究室
附　章　礼敬問題—東晋から唐代まで—
第Ⅱ部　祀天神と釈奠
第一章　中国の天神・雷神と日本の天神信仰
第二章　唐代の釈奠
コラム1　寒食展墓の開始
第三章　釈迢空『死者の書』と唐代の宗教
附　章　「両晋時代から大唐世界帝国へ」補遺
コラム2　E・H・シェーファー著『サマルカンドの

金の桃―唐代の異国文物の研究』序言

第Ⅲ部　隋唐の石刻

第一章　唐代長安の石刻―その社会的・政治的背景―

コラム1　決定版『雲岡石窟』―世界に誇る石窟寺院研究の金字塔―

第二章　京都大学所蔵の唐墓誌

第三章　魏徵撰の李密墓誌銘―石刻と文集との間―

コラム2　魏徵の李密墓誌銘

第Ⅳ部　遣隋使と遣唐使

第一章　遣隋使と遣唐使

第二章　遣唐使の二つの墓誌―美努岡万と井真成―

コラム1　円仁―日本最初の大師「慈覚大師」の見聞記―

コラム2　「漢俳」第一号に寄せて

第三章　唐代の過所と公験

附　章　入唐僧と旅行記

第Ⅰ部は、隋唐の仏教史が概観される。第一章の論点は二つある。第一に、三井文庫蔵『華厳経』巻四六の願文に「西方天寿国」とあることから、天寿国繡帳銘文中の「天寿国」は阿弥陀浄土を指すとした谷口雅一氏（大橋一章氏との共著）に対し、石塚晴通氏・赤尾栄慶氏の鑑定により上記『華厳経』巻四六は偽写本と判明したのであり、右経を天寿国繡帳の解釈に援用するのは不可能と断ずる。第二に谷口氏は、倭国使が「重興仏法」の菩薩天子と賞したのは煬帝であったとした。氏は、「重興仏法」は文帝の治世を指す語とした塚本善隆氏の論を補強、文帝こそが「重ねて仏法を興した菩薩天子」に相応しいと再確認する。

続く唐代では、仏教と国家権力の関係が緊張と緩和を繰り返す。第二章から第四章では、三度にわたる緊張と緩和の過程が詳述される。

第二章では、道士の傅奕と仏僧の法琳の論戦が辿られる。隋文帝以来の宗教政策を変更するよう高祖に迫った傅奕に対し、法琳は仏法を付嘱された国王として、文帝の宗教政策を踏襲するよう求めた。仏・道の論戦は続き、貞観一三年には、法琳が皇宗を誹謗したと告発される。太宗は、正法を付嘱された国王の立場から『遺教経』の本旨にそむく僧・尼を批判した。法琳の発言を換骨奪胎し、仏教を王法の下におこうとしたものであった。さらに、氏族志の再編纂という時期に唐室の本系は老聃ではなく拓跋達闍であると主張した法琳は、京邑の僧侶からも批判され、四川へ徙される途上で死去した。

第三章は、「皇唐嵩岳少林寺碑」の研究史を整理し、京都大学人文科学研究所所蔵の拓本に基づいて本碑の銘文を時代順に移録しつつ、開元年間の国家と仏教の関係を論じる。

碑陽上截（①：李世民による武徳四年の教書）・碑陰上截（①、②：少林寺に田地・碾磑を与えた武徳八年の教書と案巻たる牒、③：①と玄宗の碑額を少林寺に与える開元一一年一一月の牒）・碑陰下截（④：貞観六年に寺田の所有を承認した経緯を明記する文書、⑤：寺荘の所有を再確認する開元一一年一二月の牒、⑥：武徳四年の立功僧）・碑陽下截（⑦：寺史。開元一〇年に仏寺・道観の田荘が括責されたが、少林寺の寺荘は官収されなかった次第を特筆）の移録・分析を踏まえて氏は、本碑建立の目的は、括戸政策が進行する中、今後も生起するだろう寺領荘園の没収に備え、予め最善の手段を講じることにあったと解明する。

第四章では、「大達法師玄秘塔碑」の碑陰上截に刻まれた「勅内荘宅使牒」が取り上げられる。碑陽には、瑞甫の事跡とその埋骨塔たる玄秘塔の縁起が記される。会昌元年に建立された本碑には、一〇年ばかり後、碑陰上半部に先述の牒（大中五年）「比丘正言疏」（大中六年）が追刻された。前者は比丘正言が官有の荘宅を払い下げられた次第を証明する官文書で、後者はその間の事情を記す。両文書は、会昌の廃仏を経た後、将来の非常事態に備えて追刻されたのであって、嵩岳少林寺碑建立の意図と軌を一にするものであったという。

第五章は佛教史學會第五五回学術大会の講演記録である。学術史的に興味深い情報を含む。北朝・隋唐仏教史を研究する際に留意すべき点や、近年中国で出土した文物・刊行された図書を用いた研究の可能性が示される。

附章では東晋に沙門王者礼敬問題が議論されて以降、宋・金代に至るまでの礼敬問題が概観される。

第Ⅱ部第一章は、日本古代では三度、祭天の儀が行われたことを紹介し、北アジア諸民族の祭天・祭天神に言及する。後には、菅原道真を祭る天神信仰が興る。天神信仰と雷神とのかかわりについて、日本の雷信仰が中国のそれと連絡していたとする宮崎市定氏の見解にふれ、日本の天神信仰研究に注意を促す。

第二章は、二〇〇二年度における足利學校釋奠記念講演の記録である。『唐六典』『貞観政要』「孔子廟堂碑」『制度通』を用い、唐代を中心に明代までの釈奠における孔子の位置づけの変遷が説明される。

第三章は、二〇一〇年、高倉会館における講演記録である。釈迢空著『死者の書』から始めて、景教＝キリスト教ネストリウス派の唐代における展開に言及する。

附章は二〇〇八年に文庫化された『世界の歴史6』のあとがきである。初刊行（一九九七年）以降に発見された、二つ

の分野における重要文物を紹介する。第一が「青海の道」の歴史的重要性を示す、吐谷渾人墓から出土した膨大な絹織物、第二がソグド人の活躍を伝える、太原・西安出土の画像石やバダム諸墓出土の官文書である。

第Ⅲ部第一章は、一九九四年に京都文化博物館で開催された「大唐長安展」会期中の連続講演会の記録である。出展文物によりながら、銘文の面白さを平易に解説する。

第二章は、羅振玉氏が京都大学文学部博物館（現京都大学総合博物館）に寄贈した唐代墓誌六点のうち、羅振玉『芒洛冢墓遺文』に所在の注記がない「段会墓誌」「崔府君夫人鄭氏合祔墓誌」の解題である。京大所蔵「段会墓誌」は永徽三年時点のもの。翌年に夫人が死去、合葬の折に作成された墓誌が別に存在することに注意を促す。鄭氏は崔稃の前夫人で、崔稃と合葬された。墓誌の文は唐中期に文章家として知られた鄭涵による。

第三章は、続々と発刊された墓誌拓本写真を収録する書籍につき、各々の長所と特徴が詳述され極めて有用である。墓誌には著名な文章家が撰述したものが多くある。しかし推敲はもちろん、墓誌撰述時点と文集編纂段階における撰者の立場の変化などにより、しばしば変更が加えられた。『文苑英華』所収「唐故邢国公李密墓誌銘」も、出土した「李密墓誌」の文を増補・削除する。注目すべきは、反乱により処刑された李密の葬儀に柳徳乂・薛宝・杜才幹が助力した事実を、文集が消去することである。魏徵が墓誌を文集に再録するに当たり三者を削除したのは、本人や親族に何らかの累が及ぶのを回避するためであった。誌石の墓誌と文集の墓誌に差異がある場合、単に前者を重視するのではなく、両者の差異がもつ意義を慎重に考察する重要性を喚起する。

第Ⅳ部第一章は、九州大学21世紀ＣＯＥプログラム主催国際シンポジウムの講演記録である。大業四年遣隋使のいう「海西の菩薩天子」は文帝を指したために煬帝は「不快」となったのであり、隋使来日時の倭王の言に「海西に大隋礼儀の国あり」とあるのは、代替わりを知った倭国の外交的配慮と解く。また遣隋使以降、隋唐の文化が将来されたことは著名である。しかし、将来しなかった・できなかった文物に目を向けることで、東アジアにおける交流と変容をより総合的に理解できると指摘する。

第二章は、「井真成墓誌」に学界が沸く中、入唐経験者の墓誌としては、より早くに発見されていた「美努岡万墓誌」に改めてスポットを当てる。明治期における発見の経緯、墓誌の材質・法量、墓主は火葬されていたなどの情報が、銘文の移録・訓読とともに呈せられる。

第三章では、過所・公験に関する研究史が詳細に整理され、入唐僧により将来されたものと、中国で出土したものと、唐代の過所・公験が網羅的に収集・移録される。

入唐僧将来の公験は最澄・円珍のものが、過所は円珍のもののみが現存する。氏は、両者の公験・過所を、特に前者は元赤たる牒・公験もあわせ、入唐後の行程を辿りながら写真を併載して移録する。さらに、文書の発給手続きを詳しく確認する。

他方、敦煌・吐魯番出土の過所・公験は首尾完備せず、官印を有するのも二点のみで、しかも写真図版が公表されているのも一部である。そこで氏は、敦煌出土の過所一通（副本）、吐魯番出土の過所二通（正本・副本）、吐魯番出土の公験二通（副本・正本）の移録を行い、最小限の解説に止めるとするが、発給のプロセス、文書を下附された人物の動向、発給に関連した人物に関する情報が詳しく抽出される。

附章は二〇一五年度國學院大學文化講演会における基調講演の抄出である。『遊方伝叢書』（『大日本仏教全書』）が出版されて以降の入唐僧研究の歴史を、宮崎市定氏・佐伯有清氏・小野勝年氏を中心に概観する。章末には必読の参考文献が列記される。

各章の内容は以上のとおりである。政治史における豊かな業績を背景とする通史は（第一部）、中国仏教史研究の基礎となるものである。加えて、京都大学が拓本・原石を所蔵する碑文・墓誌やその他金石文、出土・伝世文書の録文と詳説が、綿密な研究史整理とともに一書に収められたことは、唐代史を学ぶ者にとって非常な幸運である。

本書を通じ、優れた研究の基盤には、徹底的な先行研究整理と綿密な史料解読が存在すること、そしてその基盤が大きいほど構築される理論が磐石たりえることを改めて痛感した。同年に刊行された『隋唐都城財政史論考』『敦煌から奈良・京都へ』（いずれも法藏館）とともに熟読をお勧めする。

なお、礪波氏の論文集紹介という大役に取り組んではみたものの、稚拙で要点を得ない紹介に終始してしまったことを、礪波氏と読者の方々に深くお詫び申し上げる。

（法藏館　二〇一六年四月刊　Ａ５判　四三八頁　九、〇〇〇円＋税）

（奈良女子大学准教授　かわかみ　まゆこ）